

---

7/7

麻生柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

7 / 7

### 【ZPDF】

N6104M

### 【作者名】

麻生柚葉

### 【あらすじ】

七夕の日に捧ぐ。

それは七夕の日に起こったお話。

お星様から星の子に送られた一つの出会い。

そして、新たに出会いを願うお星様のキセキ

## お 01 · 夜空に浮かぶベガとアルタイルへ（前書き）

この創作はサイトの七夕記念で創つた物です。

## お 01・夜空に浮かぶベガとアルタイルへ

それはとある七夕の日

夜空には雲一つ無く、零れ落ちそうなほゞ沢山の星が輝いていました。

きつと織り姫と彦星も年に一度の逢瀬を楽しんでいたところどう。

そんな星空の下、星見を楽しんでいた一人の精靈が居ました。名前はノーノ。

小さくて可愛い夜羽の子。

「今日は星が一際綺麗ですね。」

普段は星なんて見るのを忘れてしまつハーノですが、今日は特別。少しでも星に近づけるようにこの辺りで一番背の高い丘の上、ノーノは寝そべり星を見上げています。

「手を伸ばしゅと星が掴めそうだし…」

そう錯覚してしまってそうになるくらい輝く星は近くに見えて…近くに…

「つて、本当に近づいて来るでし…」

思わず飛び起きて確認して見ても、丘を擦つてみても、間違い無く星が一つノーノの方に落ちて来るではないですか。

ノーノは慌てて辺りをオロオロと動きまわつてみますが、そんな事お構いなしに星はどんどん近づいて来ます。

辺りにはクッショソになりそうな物は無く、このままでは星は地面に落ちて碎けてしまうかもしれません。

「ひやああ！」

叫んでも状況は変わりません。

考える事ほんの数秒、潔く諦めてノーノは星を受け止め事にしました。

ノーノの小さな手では心もとないですが、精一杯広げて受け止める体勢になりました。

運動神経には自信があるし、体も頑丈な自信もあり。

だから、大丈夫。

きっとあんなに高い所から落っこちて来るんだから、星は怖い思いをしているに違いありません。

それならば、着地の時だけでも怖くないよう気にしてあげないと。

そんな思いを胸に、星を待ち構えるノーノ

星はどんどんと近づいて来ます。

でもそれは思っていたよりもゆっくりで。

キラリと瞬きながらノーノの手のひらに収まりました。

「お星しゃま捕まえちゃったでし……」

キラキラ輝く星は夜空に浮かぶ星以上に綺麗で、とても不思議な力を感じました。

## 星 02・私の願い、叶えてくれますか？

キラキラ光る落ちてきた星。

それは何処か温かみがあり、しかしその中に冷たさも存在している  
ようでした。

不規則に輝く星はきっとどんな宝石よりも美しい。

ノーノは目を奪われてしまいます。

「貴方の願いは何ですか？」

「！」

何の前触れもなく、いきなり背後からかけられた声にノーノは驚き  
のあまり飛び上りました。

勢い良く振り返ると、そこには一人の少女の姿。

いくら星に気を取られていたとしても声をかけられるまで気がつく  
ことが出来ませんでした、気配を感じませんでした。

戦闘にも特化している夜羽の精霊が、気付く事が出来ない存在にノ  
ーノは目を丸くしました。

しかし少女はそれに気が付いていると言うのに、ただ、微笑むだけ。  
短い髪が風に揺れ、その色合いは今にも夜に溶けて消えてしまいそ  
うです。

「あなた・・・誰でしか？」

「私は貴方の持つナガレボシを使って貴方の願いを叶える者。

ナガレボシは願い事を叶えてくれる・・・そんなお話を知つてい  
るでしょう？」

私はナガレボシ。貴方の願いを叶える事が出来る者。」

ナガレボシのお話。

ナガレボシに三回願いを唱えることが出来ると願いが叶うらしい。  
ナガレボシを拾う事が出来たのなら、星の子に願いを叶えて貰える  
らしい。

誰でも知つてゐる、御伽話。

お話の中だけの存在だと思つていたそれが今、ノーノの皿の前に居  
た。

不思議と嘘だとは思いませんでした。

何よりノーノの手の中には落ちてきたナガレボシが  
そして彼女の存在が、出す雰囲気が嘘だとは思えませんでした。

「ナガレボシ・・・星の子・・・」

「そうです。私は・・・星の子

だから、私は貴方の願いを叶えにきました。」

手にしたナガレボシが肯定するように熱く、熱を帯びた氣がしまし  
た。

「貴方の願いは・・・」

「待つてください！あなたは誰でしか？」

願いを聞きだす為、もう一度問い合わせようとすると遮られてしまい  
ました。

それは一度答えがはずなのに。

少女は頭にハテナを浮かべます。

普通の人ならば、ナガレボシを手にした時点で理解します。

それで理解できなくても、音も無く現れる少女を見てその存在で悟  
ります。

「？ 私は星の子、ナガレボシ、願いを叶える者・・・

私を示す言葉はこれくらいしか無いのだけど。

私と言つ存在を証明できる言葉を他に私は持つていないから。」

「違う、違うでしょ！ ノーノが言いたいのはそうじやなくて・・・」

（変な人・・・）

少女は思う。

今までナガレボシを手にする人は、それで納得し願いを叶えておしまい。

それなのに、

「そう、名前！ 名前でし。ノーノはノーノでし。  
あなたのお名前何でしか？」

「・・・な・・・まえ？」

相手は願い事を叶えてくれる存在とだけ認識していれば良い。  
人と関わらず、端的に言葉を紡ぎ仕事をしておしまい。  
その方が、少女の心も楽な事でした。

それなのに、それなのに、

「そうでしーあなたの名前教えてください。」

キラキラした、星にも負けない輝きをした瞳に吸い込まれてしまい  
そうで

少女を見詰める目は、少女のように曇った目では無く真っ直ぐで  
人の心情に敏感な少女は気が付いてしました。

ナガレボシでも、願いを叶える存在でもなくノーノは“少女自身”  
に純粹に興味を持っているのだと。

そんな感情を向けられるなど初めてで。

救世主だとか、願いを叶えた事による感謝だとか、ナガレボシの  
まけだとか・・・

願いを叶える者としてしか、見られる事しか無いというのに

「・・・ソロフ」

思わず駆け乗ってしまったのは、初めての事でした。

様 03・例え、それが絶対に叶つと叶つ保障は無くても

「ソロラちゃん! 綺麗な音が揃つてるでしょ。」

「あつ、ありがとう。あの、それより貴方のねが  
「ノーノでし」

「…ノーノの願いは何ですか?」

「願いでしか?特に思いつかないんでしけど。」

「え、…」

やけにあつやうと返すノーノにソロラは目を丸くしてしまいました。

人は誰しも願いを持つもの。

欲など、無くそつと思つても無くなつてはくれないもの。ナガレボシを手にしながら、絶対に叶う約束がされていながら思いつかないなどと言つ人をソロラは見たことがありませんでした。

「えつと、強くなつて王様になりたいとか」

「ノーノは十分強いでしょ?それに王様には興味ないでし。」

「魔法が使えるようになりたいとか」

「魔法でしか?魔法が使えなくても不憫はしてないでしょ。」

「その口調を矯正してみるとか…」

「これが無くなつたら、ノーノの個性が減るでし。  
これはノーノの一部でしから。」

ソロラは頭を抱えます。

今まで沢山人の願いを見てきました。叶えてきました。

人の願いについて誰よりも知っている筈だし、願いが思いつかないと言つノーのにいくらでも提示出来る筈です。

しかし、

（そういえば、今まで私はどんな願いを叶えてきた？）

傷つかないように、関わらないように。」

それを繰り返し、必死に目を逸らし続けたソロラの頭には願いが残つていませんでした。

「それじゃあ、誰か助けたい人は居ないんですか？  
お友達に困っている人がいるとか。」

「ノーノは自分で力を貸してあげることが出来るでしょ。  
友達が困ってるなら、ノーノは他人任せじゃなくて自分の力で助けてあげたいでし。」

「・・・じゃあ！

何処かで苦しんでいる子供たちとか、助けを必要としている人たちに救いが訪れるように願つてみてはどうですか？」

「ノーノは見た事も知る事も無い赤の他人をたしゅけたいと思うほど、優しい人じゃないでしょ。」

自分の為も、他人の為も願いが無い。  
願いが無いと言うには語弊があります。

ノーノは沢山の夢や願い事がありました。

だけど、それはノーノ自身が自分で叶えたいことでした。  
強くなりたいなら、努力すれば良い。

悲しんでる人が目の前に居たのなら、自身の手で力を貸してあげれば良い。

確かに、友人の中でも苦しんでいる人は居る。

でも、彼は自分の力で乗り越えるべきだと思つ。

綺麗な宝石だつていらない。

それ以上に大切な物を知つてゐるから。

「何か、何か無いんですか？ 私はノーノの願いを叶えなくちゃいけないんです。」

「じゃあ、ノーノの友達になつてください」

「・・・それは、出来ません。」

「どうしてですか？」

「私は願いを叶える事が出来るけれど、それは間接的にです。

“私自身”が願いを叶える事は出来ません。何かをしてあげる事はできません。

私が誰か、友達になれる人を探し導く」とは出来るけれど・・・

「ノーノはソロラちゃんと友達になりたいんですけど。」

「ノーノが願うのは私自身です。だからこそ無理なんですね。

それに、私は一所に留まる事が出来ません。もう、次に貴方に会う事は出来ないでしょう。」

「うーん。」

「・・・」

纏まる事無く時だけが過ぎていつて

そんな一人を夜空のお星様だけが見ていたのでした。

## の 04・私は毎年、七夕の「」に祈り続けましょう

お星様、お星様

どうか、私の願いを叶えてください。  
何度も、この言葉を聞いたでしょ  
うか。  
何度も、願いを叶えてきたのでしょうか…

二人は困ってしまいました。

ソロラが提示すればノーノに否定され、ノーノが提示すればソロラに否定されます。

だけれど、何故だかソロラは嬉しく感じてしまいました。  
(こんなに長い間会話するなんて、関わるなんて、人と接する事なんて初めて。)

この人は、この田の前に居るソロラよりも身長の小さな精靈は変わつていると思う。

それは、悪い意味ではなく良い意味ではあるが。

本当に友達になりたいと、願ってしまいます。

ノーノとこうして話をしていたいと思つてしまします。

ソロラはナガレボシの行く先にしか進めない。

ナガレボシ自体、珍しくめったに手にすることが出来ない貴重な存在。

一回もネガイボシを手にする事が出来る人など居るのでしょうか。  
珍しいといつても数存在するナガレボシ、そして一人きりのソロラ。  
そのネガイボシをソロラが見つける事が出来る事が出来るのでしょうか。

そんな確立、どれだけ多く見積もったところで一%よりゼロ%に近い。

ふと、真剣な表情をノーノが見せました。

今まで一人して眉に皺を寄せて悩んでいたと言つた。

丸い茶色の瞳が綺麗だとソロラは思う。

ソロラには持っていない優しいその色が。

その瞳に映る、冷たい色をしたソロラの色が揺れる。

「…自分じゃない、他人の為に願つても良いんでしょうね？」

「はい。人の為に何かしたいと言うのも、また一つの願いだから。」

「あなたの願いは何でしか？」

いつも、いつもソロラが口にする言葉。  
それが自分に問われる日が来るだなんて

時が止まつた気がした。

## キ 05・セタの田元会った、初めての友人に捧ぐ

哀しい、辛い、寂しいと瞳が揺れている事なんてすぐに分りました。そして、すでにその事を諦めている事も。

だけどそれでも、心のどこかで諦めきれずに強く思っている事も。

きっと、この能力を持つには彼女は優しすぎたのです。

たつた一言、たつた数文字。

それを発しただけで青空色の瞳が零れ落ちそうなほど見開かれました。

名前を聞いた時も、願いが思い付かないと言つた時も動搖しているのはすぐに分りました。

ソロラは顔に出やすい。

それを出すまいと必死に眉を寄せている事なんて会つてから時の経つていらないノーノでもすぐに分りました。

「・・・ど・・・う・・・して・・・」

「どうしてつて、そうすればソロラちゃんの願いを叶えてあげる事が出来るでし」

「・・・なん・・・で?」

私と、さつき会つたばかりなのにそんな事・・・言えるの?」

「そんなの、知らない赤の他人よりソロラちゃんの願いを叶えられた方が嬉しいでしょ。」

「で・・・も、」

「ノーノはこれでも長い間生きてきたでし、それでもナガレボシなんて見たの初めてでしゅし、

見たことあるなんていう人聞いたことも無いでし。

あなたに、もう会うことが出来ない無いなら。ノーノはソロラちゃんにこのネガイボシをあげたいでしょ。」

ソロラの声が掠れていくのが分ります。

それでもノーノは止める気にはなりませんでした。

今まで、こんな事言う人なんて居なかつたのでしょう。

ノーノは自分でも変だとは、人とは少し考え方がずれてるのは知っています。

損をすることや理解されない事も、またその逆だって沢山経験してきました。

人と違う。それが何だというのでしょうか。

だからこそ、気付く事ができる事がある。

だからこそ、やれる事がある。

「そんな・・・の、無いです。私に願いなんて。」

「嘘つき!」

しゃびしこそて言つてる、辛いつて言つてる、誰かに分つてもらいたいって思つてるでし!-!」

「思つても叶えられない。何を願えば良いと言つの?」

「私に星の力を無くす様に願うの?ノーノに傍が居れる様に願うの? そんなの出来ない、叶えられない・・・よ。」

「ノーノはここを捨てられない。大好きなこの場所を家族を友達を。

ノーノがソロラちゃんのしゃびしきを埋めてあげる事は出来ない  
でし。

ソロラちゃんもしゅてられない物がある。それはお互いしゃまで  
し。

だから、ナガレボシに変わりに叶えて貰うでし。」

ノーノはナガレボシをソロラの田の前に突き出すと一番の笑顔で言  
いました。

「こいつが、ソロラちゃんの前にじゅっと一緒にいてくれる子が現れ  
ましゅようだに。」

ソロラちゃんの事を理解して友達になつて、大好きになつてくれ  
るよつな子と出会える事が出来ましゅよつだ。」

ナガレボシはふわりとノーノの手から浮き上がり、旋回します。  
その願いに答えるようにナガレボシは淡い桃色の光を放つて輝くと、  
ソロラに降り注ぎ消えていきました。  
ソロラが何か言葉を発する前に、能力を使つ前に全ては終わつてしまつていて

叶えたのはソロラではなくノーノとナガレボシ  
そう、それは一人分の願い。

「どうして・・・私は、何も・・・」

「気付いて無かつたんしか?こんなにもあなたは星に愛しゃれて  
るのに」

いつだつて、星はソロラ見守り温かかった。

ソロラは星が大好きで、その逆は考へてもみませんでした。  
生きていないと決め付けて、ずっと思い込んでいました。

星は自分の意思で動き、輝きそして消えていたというのに・・・

「ありがとう、あり・・・がとつ、『ぞ』います・・・」  
ナガレボシの光を浴びた体を抱きしめて、ソロラは涙が止まりませんでした。

どの位経ったでしょう

師匠からこの能力を受け継いで、師匠が亡くなつて一人になつて、自分の中の時が止まつて  
誰もがその存在を知りながら、誰も“彼女自身”見てくれる人が居なくなつて  
人とは違ひ長い長い長い年月を過ごしながら、諦めて諦めて、それでも心のどこかであきらめきれなくて

「この願いが叶つた後は、ソロラちゃんが頑張るんでよ。  
だつて、ノーノが願つたのは“出会つ”と言つ事だけだし。  
幸せになれるのかは、楽しく生きていく事が出来るのかは、ソロラちゃんとその子の頑張り次第なんですから。  
ノーノはきつかけを作つただけでし。ノーノはソロラちゃんの幸せをナガレボシに願つた訳では無いんでしから。」  
「はい。・・・それでも、ありがとうございます。  
私の事を考えててくれて。私の事を思つてくれて。私に願いをかけてくれて。私に光をくれて。」

全てを与えてくれた訳ではない。

むしろ、それがソロラにとつては嬉しかつた。  
ノーノのそんな考え方が、全てを与える以上に自信の事を考えてくれていると伝わつて嬉しかつた。

悲しさではなく嬉しさで溢れる涙を目に貯めながら、眉を寄せる事無くソロラは穏やかに笑いました。



## セ 06・どうか、君が大切な人と幸せになれますように

貴方は一年にたつたの一度しか会え無い事を嘆いていますか？  
例え、姿が見えなくても、声が聞けなくとも、触れることが出来な  
くても。

それでも、私は思い続けたい。

願いを叶え終つた後にこんなにものんびりしている事など一度もあ  
りませんでした。

この辺りで一番背の高い丘の上、沢山の零れ落ちそつた星がよく見  
える場所。

二人は寝そべつて星を眺めています。

「ソロラちゃんの幸せは、ナガレボシに願うんじゃなく友達として  
願うでし…」

「友達として…？」

「もつ、会う事が出来なくて心の持ちようでし。

それとも、ソロラちゃんは一人と友達になるの嫌ですか？」

「ううん。そんな事無いよ。とっても嬉しい。」

「それは良かったでし…」

「じゃあ、ソロラちゃんもお星様にお願い事するでしょ」「えつ？どうしてナガレボシじゃない星に願い事を？」

「ソロラちゃんもしかして忘れてましゅか？」

今日は、七夕でしょ。ナガレボシでは無い星と一緒に願うでし…」「そう…ですね、では私も願います。ノーノの幸せを友達としてベガとアルタイルに…」

お互に顔を見合わせ、心の底から笑いました。

一人で見上げた空にはより一層綺麗に輝く満天の星たち。織姫と彦星のように、年に一度でさえ会う事は出来はしないけれどたつた一度しか、もう一度と会えないとしてもそれでも、幸せだと思えました。

七夕の日の君に捧ぐ

君に出会えたこの日を、私はずっと忘れる事は無いでしきょう。  
君に教えられた事を、私は胸に進んで行くでしきょう。  
君に与えられた物を、私は大切に守り続けて生きていこうでしきょう。

それは七夕の日に起こったお話。

お星様から星の子に送られた一つの出会い。  
そして、新たに出会いを願うお星様のキセキ

おつかれ...

キ 07・そして私も、幸せに向かって歩いていへ事を墨に書こまよ

おまけ

それは、とある世界のとある洋館。  
見るからに幽霊屋敷なその場所は、外見に似合わず沢山の人気が滞在  
していました。

「おい、何ニヤニヤしてるんだ？お前。」

「わー本当だ。変な顔だね。」

「変。」

「そ、そ、そつ、揃つてそんな事言わなくたつて良いじゃないでし  
か！」

「だつて、なあ？」

「俺にはそう見えたんだから。仕方ないよ。ねえ？」

「うん。私もそう見えた。」

「きこいいい！酷いでし！..」

「まあまあ、落ち着いてください。一体どうしたんですか？」

「嬉しい事・・・あつた？」

「えへへ、そなんでしょ。嬉しいんでし。」

「それは良かつたですねえ」

「・・・良かつたね」

一番小さな身長の子の手には一冊の絵本。

簡単に書かれたその絵本の内容は短いけれど  
ずっとずっと気になっていた友達の事が描かれていて

「よかったです・・・」

物語は、どこかの世界で実際に起こったお話。

きっと、この世界ではない所でこの絵本に描かれていた事が本当に  
起ったのでしょうか。

いつも、なんだかとても心が温かくなりました。

「今日は七夕でしょー。皆でお願い事するでしー。」

あなたはその後幸せに過ごしていきますか？  
遠く離れた地から、友達としてあなたの幸せを願っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6104m/>

---

7/7

2010年10月10日02時11分発行